ジャパンナレッジ本棚活用法

叢書や雑誌コンテンツをあたかも書棚から抜き、ページをめくるようにして、じっくりご覧いただく……それが、ジャパンナレッジの「本棚」ページです。
今回は、日本を代表する経済雑誌「週刊エコノミスト」を例にとって解説してみましょう。

※画面は2014年7月現在のものです。

ずらりと並んだ表紙から読みたい号をクリック。

検索結果一覧が実際の目次と同様にページ順で表示されます。

2. 2014年の経営者 編集長インタビュー／716 平野聡 トプコン社長
◇土木建設、農業の自動化を進める interviewer 横田恵美（本誌編集長） 土木作業や農作業を自動化するためのシステムで業績を拡大。2014年3月期は ...
[平野聡 横田恵美 内田誠香] 2014年07月15日号

読みたい記事を選べば、本文ページが表示されます。

記事本文PDFのアイコンをクリックすれば、誌面と同様のページをPDFでご覧になれます。

■お問い合わせ先　NetAdvance 小学館グループ　株式会社ネットアドバンス　ＪＫ通信編集部
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-30 昭和ビル３F e-mail：b2b@japanknowledge.com

ジャパンナレッジ通信 JapanKnowledge Lib 2014年秋号

大阪市立中央図書館辻本尚士館長（写真左）と弊社森田義久取締役（右）

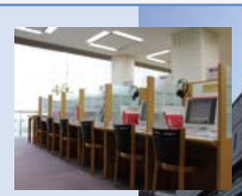
大阪市立中央図書館、ジャパンナレッジフレンドシップ館に！

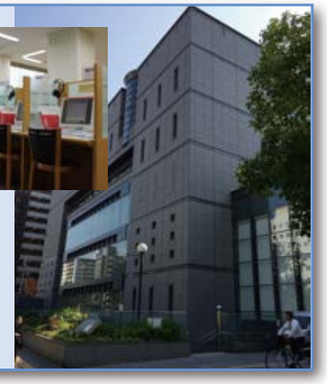
感謝状
大阪市立中央図書館殿

小さい子どもからビジネスパーソン、そしてご年配の方まで……幅広い年齢層が集い、たくさんの人に愛されている、大阪市立中央図書館。所在地は大阪市西区ですが、それ以外の23の区の地域図書館を束ねる役目も果たしている、自治体としては最大規模の図書館です。ジャパンナレッジの利用率も公共図書館の中では断然トップ！　ということで、このたび、ジャパンナレッジフレンドシップ館に認定。

さて、なぜジャパンナレッジの利用率が高いのか――その秘訣を探ってきました。（2、3面にインタビュー記事）

大阪市立中央図書館





大阪市西区北堀江にある公共図書館。蔵書冊数は約 200 万冊。閲覧室には図書約 30 万冊、雑誌約 3000 誌、新聞約 340 紙を配架。大阪市内の各区にある 23 の地域図書館のセンターとしての役割も担う。「いつでも、どこでも、だれもが課題解決に必要な情報にアクセス可能な“知識創造型図書館”」をめざし、市民が創造性や生産性を高められるように支援、イベントなども積極的に行なっている。平成 21（2009）年には、商用データベースの数が多く、利用が簡単であるなど図書館でのデータベース利用のモデルを示し、知識創造型図書館としての活動が評価され、「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー 2009 大賞」に選ばれた。ちなみに大阪市立の図書館は大正 10（1921）年 6 月 20 日に開館した阿波座図書館（西区）、西野田図書館（北区）が最初。

住所：大阪市西区北堀江 4-3-2　TEL：06-6539-3300（インフォメーション）
大阪市立図書館 HP：http://www.oml.city.osaka.lg.jp/

インタビュー図書館びと

大阪市立中央図書館 澤谷晃子さん

”ググる”よりも、”ジャパンナレッジる”を広めたい！

公共図書館ではジャパンナレッジの利用率が群を抜いてナンバーワン！ このたび、ジャパンナレッジフレンドシップ館となった大阪市立中央図書館の澤谷さんに具体的な取り組みについてうかがいました。

なぜ、商用データベースの利用率がそんなに高いのか？

梅田になんば、心斎橋に京橋、天王寺……大阪といえばとってもにぎやかなイメージですが、中央図書館のある北堀江は街中といえども落ち着いた雰囲気。おうかがいした日は休館日だというのに、返却資料を抱えた利用者の方がたくさん訪ねて来られていました。

「利用者は小さい子どもから学生さん、ビジネスパーソンにご年配の方と幅広いですね。みなさん、さまざまな課題を抱えて来館されます」

と語るのは、同館の澤谷晃子さん。さて澤谷さんのお仕事、いったいどんな内容なのでしょうか？

「企画・情報担当で情報システムを受け持って、今年で7年目になります。おもにシステム運用の管理・調達を行なう部署ですが、商用データベースも担当しています。データベースの導入に際して、まず予算取りをし、利用サービス担当の職員と相談し選定のうえ、契約事務をしています」

大阪市立図書館では平成19（2007）年、知識創造型図書館改革がスタート。

「改革の柱の一つに、『レファレンス機能・情報サービスの高度化』があり、それを実現するために同じ年に商用データベースの導入を開始しました。導入後5年の間に、年間12万アクセス達成が目標。その最中に『ライブラリー・オブ・ザ・イヤー2009大賞』を受賞。市民の身近な場所で、データベースをコストパフォーマンス高く提供していることなど、知識創造型図書館としての活動が評価されました。そして5年のうちに12万アクセスの目標をめでたく達成することができました」

さて、商用データベースの利用率を高くするための秘訣とは何なのでしょう。

「ほかの自治体の図書館さんですと、データベースごとに利用できる端末が決まっていたり、図書館カードがないと使えなかったり、事前に申し込みが必要だったりすることが多いようですが、大阪市の場合、多機能OMLIS（オムリス）という情報検索端末が全館に113台（うち中央図書館は42台）あって、空いていれば誰でも28の商用データベースが無料で利用できます（一部中央図書館のみで提供）。ハードルが非常に低いのが大きなポイントですね。また職員も自分が使っていて『いいな』と思うことをアピールするようにしています。利用者さん向けに簡単なマニュアルを作ったりもしているんです（左記①を参照）」

使ってもらってなんぼ、大阪人だからこその発想

データベース利用率UPのための取り組みには、独特のアイデアが活かされています。

「平成22年度に『商用データベースまつり』（②）を初めて開催しました。市民の皆さんに講座を受けていただいて、データベースを知るきっかけになれば、と企画しました。まず導入しているデータベースの提供元さんすべてに声をかけてみたら、予想以上の10の提供元さんが賛同してくださって。交通費も出ない、日曜日という日程にもかかわらず、『アピールのためなら協力します！』と。開催前には、1階のエントランスギャラリーで講座の宣伝を兼ねて、商用データベースのパネル展示をしました。おかげで、当日は〝まつり〟というネーミングのごとく大盛況。参加した人から『今後も使ってみようと思った』と反応も上々で、以降、毎年違うテーマで開催しています。そして『商用データベース検定』（②）。学校の夏休み期間中にデータベースを広めるにはどうすればいいか考えていたら、ちょうどそのころ検定ブームだったので、じゃあ、検定をやろう！と。クイズ形式でとっつきがよかったみたいで、子どもさんもたくさん参加してくれました」

ところでジャパンナレッジはデータベースの中で職員たちの利用頻度が断トツだそうです。

「相談カウンターや3階のレファレンスルームで市民の皆さんから質問を受け付けています。とくにレファレンスルーム（③）へは、コールセンターのごとく、こんな言葉を耳にしたけど調べてほしい、という電話がしょっちゅうかかってきます。大阪人の習性なのか、図書館やったらわかるやろ、と質問を受ける件数がほかの自治体さんと比べて多い。調査相談でわからないことがあったら、辞書や百科事典で調べるというのが司書の鉄則と先輩に教わりましたので、電話の前のパソコンで、まずジャパンナレッジにあたるようにしています。『日国』にありますとか、『国史大辞典』に載っていますねとか、典拠や責任の所在を明確にして即座に答えることができるんです」

そして、澤谷さんは職員さんにある言葉をよく使うそうです。

「よく『ググろう！』とか言いますよね。それに対して、私がほかの職員に言うのは『ジャパンナレッジってください』。ジャパンナレッジは根拠がしっかりしているので安心。『ググる』よりも『ジャパンナレッジる』！この言葉、流行らせたいですね」

澤谷さんが考える、図書館の未来とデータベース

さて、澤谷さんが考える、公共図書館の未来像とはどういったものなのでしょう？

「次世代OPACの提供をめざし、今年1月にシステムを更新し、商用データベースや内外の情報を串刺しで検索できるOMLIN（オムリン）サーチ（④）を導入しました。公共図書館では初めてのことだと思います。また、たとえばOPACで『国史大辞典』と検索すると、冊子体とともにジャパンナレッジのコンテンツがヒットするなど、公共図書館で初めてジャパンナレッジのコンテンツの書誌（約1000件）を作成しました。インターネットの普及で、それこそググっていろんな情報を手に入れられる時代。しかし同時にその情報に確かな根拠があるのか、自分に本当に必要なのか、見極めることが難しい時代でもあります。知識創造型図書館であるには、市民の皆さんが必要な情報にたどり着けるよう、つねに支援していかねばならない。そしてそれは確かな情報でなければならない。いまは館内しか提供できないものもありますが、ゆくゆくはリモートアクセスで利用者の方がそれぞれの場所でログインして使えるようになればな、と思っています」

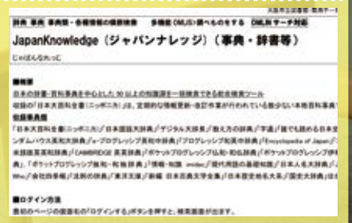
「図書館員が思うほど、データベースは知られていません。市民の皆さんにデータベースを使っていただくためには、まず職員が使いこなせないとその便利さは伝わらない。そしてつねにコスト意識を持つ。せっかくデータベースがあるんだから、使わなければもったいない。〝使ってもらってなんぼ〟。

――大阪人の精神といえども、この言葉、ほかの図書館さんにも当てはまる言葉だと思います」

「使ってもらってなんぼ」の精神がいたるところに！

①必見！ 手作りのデータベースマニュアル

商用データベースごとに中央図書館と地域館から一人ずつ担当を割り当て、データベースごとに個別のマニュアルを作成。A4、1枚のコンパクトなものだが、精通していないと書けない内容。市立図書館のHP上に公開されている。



②まつりに検定、創意工夫に富んだイベントに注目！

商用データベースまつり、および検定は平成22年度から開催。平成24年のまつり「データベースで辞書を楽しむ」ではJKをピックアップ。また検定は問題用紙を2か月程度掲示・配布し、その後1か月、解答用紙を掲示・配布。データベースの使い方がていねいに説明されている。

③「ジャパンナレッジる」している職員がそこかしこに！

電話で職員が質問に答える、クイックレファレンスサービスをしている中央図書館3階のレファレンスルーム。職員が1時間交代で市民から質問を受け付けている。質問は一人1日3件まで。年配の方だけでなく、若い人からの電話も多いとか。

④大阪市立図書館が導入した「OMLIN サーチ」とは？

ネット上の有用な情報や図書館で利用できる電子書籍、商用データベース（館内の利用者用検索端末のみ）、古文書等の画像など複数のサイトを選んで一度にまとめて検索できる次世代OPACの「OMLINサーチ」。平成26年7月1日から大阪市の職員や教員は職場の端末を使ってOMLINサーチでジャパンナレッジも検索できるようになった。